活動の概要

１．調査活動地の設定

平成 23（2011）年、東北地方太平洋沖地震発生以後、数回に分け牡鹿半島を訪問した。集落の津波被害、主要産業である漁業の中断などの甚大な被災状況は、復興作業が進むにつれ、自主避難、家族の分散、住居の高台移転など、コミュニティ存続にかかわる問題へと変化していった。筑波大学民俗学研究室では、平成 19（2007）年に実施した牡鹿半島調査実習とその報告書を震災以前の牡鹿半島民俗社会の記録として、改めて調査活動を行い、変容する集落や今後のコミュニティ再編成に向け活動を始めた。

まず、調査実習地だった大原浜において、民俗資料の緊急調査を実施した（平成 24 年）。資料の保管やその清掃・修繕の必要性を確認し、更に翌年は、牡鹿地区全域に活動範囲を広げた。牡鹿地区は、旧牡鹿町に相当する地域であり、藩政期からの地区区分でもあることから、一つのまとまりとして歴史文化を捉えることができる。牡鹿地区の金石文調査により、被災状況だけではなく史的側面を明らかにすることも活動の目的とした。具体的な調査活動地は以下の通りである。〔寄磯浜、鮫浦、谷川浜・大谷川浜、小網倉浜、大原浜、給分浜、小渕、泊浜、新山浜、十八成浜、鮎川浜〕

２．調査活動の内容

（１）聞取り調査

本調査活動を行うにあたり、半島内の居住の有無にかかわらず、関係する個人・法人・企業等に聞取り調査のご協力をいただいた。お聞きした内容は、①震災関連、②震災以前の暮らしについてであり、調査項目は調査者が設定した。

（２）古碑・古文書の調査・清掃

本調査では、震災以前の集落における人と人のつながりに注目し、主に講や集団活動の記録について保管状況を確認した。山神塔など石仏石塔や、庚申講等の文書について調査し、内容や現状についてリスト化を進めた。また、被災に関わらず経年劣化による傷みを緩和するため、清掃・梱包を実施した。このうち、大原浜集落から修繕の相談を受けた御神木祭大掛軸については、東北芸術工科大学文化財保存センター 大山龍顕先生にご協力をお願いした。

（３）共有物の調査

牡鹿地区では、講集団が御膳や婚礼衣装を所有し、集落で共用する文化があった。泊浜・大原浜を中心に保管状況を調べ、共有物が辿ってきた経緯を明らかにした。

（４）建物調査

個人宅にご協力いただき、牡鹿地区における民家建築と震災後の動向について調査した。